



2011年10月2日

いま起きつつあること...

田老ボラン ティア報告

関係作りからの ボランティア

「3・11いわて教会ネットワーク」という被災者支援の働きがあります。このネットワークの責任を負っておられる近藤愛哉牧師（盛岡聖書バプテスト教会）は、私事ですが学生時代の友人で、3月11日からフェイスブックで被災地の情報を発信し続けておられました。

盛岡から東に100キロほど進むと、津波の被害を受けた宮古市にたどり着きます。近藤先生は震災直後から宮古での支援活動が続けておられました。その働きに私たちの

玉井幸男先生が時間をかけて丁寧なかかわりを築いてくださり、8月1日から4日まで、中会の有志3名がこのネットワークに参加しました。当日だけでなく、それまでの関係作りを大切にしてくださいって実現したボランティアです。そのような生身の関りはボランティアの中でも大切にされていたことでした。

大堤防を 破壊した津波

伊能悠貴中会神学生、米山美恵子姉（高座教会）と共に参りましたが、今回は宮古の北にあります田老町での働きが中心でした。

田老町には巨大な堤防があります。1933年の三陸津波の際、村559戸中500戸が流失し、その後、高さ10メートルの大堤防を築いたのです。しかし、今回の津波はその予測をはるかに超える破壊力を持つものでした。堤防

に守られた町は安全、そう信じて津波を見に堤防まで行った人が何人もいたそうです。しかし、3月11日の津波は大堤防そのものを破壊し、町を飲み込みました。

津波だけではなく、火事も起こり、家を焼失した人もいます。津波の被害を免れた、少し山間上がったところにも居を構えていたお年寄りとも出会いました。地震が起こり、小学生たちが家の前を通って避難して行きました。ポツリと「おっかなかったよ」とおっしゃいました。

関わりの中で 痛みを共有する

ここに書ききれない多くの話を伺いました。どれもこの働きが大切に行っている関係作りの中で少しずつ聞かせてくださったことです。

このネットワークではおみや調味料を在宅被災者に配る働きなどを通して、ひたすら

話に耳を傾けています。ここではキリスト者が安易に震災を「宣教のチャンス」と考えて被災者の痛みを食い物にするようなことはしません。「直接与えられる関りの中で、痛みを共有すること」で、「形だけではなく、見せかけでもなく、その価値観や行いの動機や質において」福音に生きることを問うておられました。（この段落の「内は『クリスチャン新聞』9月4日号の近藤愛哉牧師の記事より引用）（さがみ野教会牧師・宮井岳彦）



田老で出会った仲間と共に